

生態人類学会ニュースレター

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

1996年9月1日発行

生態人類学会設立の趣旨

1973年5月に、京都大学理学部自然人類学研究室、東京大学理学部人類学教室、東京大学医学部保健学科人類生態学教室、京都大学霊長類研究所の教官、院生、研究生などが参加した第一回生態人類学研究会が、東京大学赤門横の学士会館分館で開催された。以来、研究会は毎年1回、会場を日本各地の研究機関や宿泊施設に移しながら、回を積み重ねてきた。

この研究会では当初から、国内外での長期フィールドワークを終えて帰ってきたばかりの少壮の研究者による発表を中心に据えて討論を重ねてきた。フィールドの生々しい熱気を伝える発表者に対して、参加者全員は、率直に質問をぶつけ、批判を加え、忌憚のない助言や忠告を行ってきた。これまでの23回におよぶ研究会を通じて、発表を行ってきた人たちもまた聞き手に回った人たちも、参加者全員は、こうした真剣な議論を通じて、自らの問題意識をさらに発展させて考察を深め、理論を研ぎ澄ませていった。そして再び次のフィールドワークへと立ち向かっていったのである。生態人類学研究会での討論を通じて分析を精緻化し、理論を鍛えあげてきた多くの研究が論文や単行本の形で公表されるに至っており、この20数年間に及ぶ生態人類学の進展の歴史の中で、この研究会が果たしてきた役割はきわめて大きなものであった。

生態人類学研究会に参加し、さまざまな形でその影響を受けてきた人びとは、いまや全国の数多くの研究機関に所属し、それぞれの拠点で若い研究者の育成にあたっている。研究会の年々の盛況ぶりは、まさしくそうした生態人類学の発展の歴史を物語るものである。20名そ

こそこのメンバーで始まった研究会は、数年後には常時70名前後の参加者を得るまでになり、今では100名をはるかに突破するに至っている。しかしながら、この人数は、もはや研究会として持続していく規模を越えたものになっているといわざるをえない。

同時に、活発な研究活動を続ける参加者が次々と生み出している研究成果を、どのような形で公表していくかという問題は未解決のまま残されており、今後ますます深刻な事態となっていくであろうことは容易に予測され、その早急な解決が望まれている。

自然とのかかわりの中で人間を全体として理解することを基本的なテーマとする生態人類学は、生業基盤の解明、人間活動の体系的把握、人口や栄養を中心とした環境適応などといった当初の課題から、いまや人間活動のすべての領域にまで広がりを見せ、学問としての深みをもつに至っている。自然との関係を最も重視し、したがって、人々の生活を環境の諸要素との緊密な相互関係の総体として把握する中で、社会、宗教、価値、意識、行動などといった人間存在のあらゆる側面を解き明かそうとする多彩な展開を示しているのである。

23年間に及ぶ生態人類学研究会の実績に基づき、自然的基盤の上に生きる人間のトータルな理解を目指す生態人類学のさらなる展開を期すために、このたび、生態人類学会を設立しようとするものである。

1996年3月19日

生態人類学会設立準備委員会

記事

生態人類学会の設立に寄せて

伊谷 純一郎
神戸学院大学人文学部

生態人類学研究会から生態人類学会への移行には、1人の火つけ役と、1人の仁侠の士のみならず御努力を要したとはいえ、まさに立つべくして立つ変身であったと言ってよい。それは開花にも、蝶の羽化にもたとえることができよう。

私はこの変身の集いには出席しなかったが、事前に二、三の方から御相談を受け、私なりの希望を申しあげた。一つは、初案の日本生態人類学会の日本という冠はいらぬのではないかということである。他国に類例のない学会であれば、日本は不要のほずである。もうひとつは、大小の学会が林立するなかで、そのいずれとも異なる、野外調査者の集いにふさわしい自由で個性的な学会を創設してほしいということであった。

これまで、多くのフィールド・ワーカーが生態人類学研究会を愛してきた。ここから、生態人類学を志す数多の優れた学究が育った。それ故に、この会は四分の一世紀にわたって一年も休むことなく続けられてきた。これらの意味を十分に解し、その本質を継承発展させていたきたいというのが私の願いであった。

どうして学会にしなければならぬのかという疑義が提出されたということも聞いた。権威主義的風潮に背を向け、煩瑣な学会運営事務を厭い、経済的負担から免れ

る等々のことが疑義の理由であるならば、こういった問題を払拭し改める工夫をすればよい。それらはこれまでの研究会とは無縁のことであったのだから、新しい学会の中でもそれを継承すればよい。しかし、研究会の根なし草の状態からの脱却は必要であり、その時期はきているというのが私の認識である。

若い研究者が野外から持ち帰ったファーストハンドの研究成果の発表に、長い講演時間が与えられてきたことは得難いことであったし、それをめぐってのシニアもジュニアも一緒になっての討論の伝統はこれからも大切にしてほしいと思う。またこの年會が、フィールド・ワーカーたちが互いに一年の労をねぎらいあい、新鮮な体験を語りあうための集いであったことも思い出すのである。

今日の出版事情が著しく変貌しつつあることは周知のところであろう。この学問にとってもっとも基礎をなす民族誌の出版を軌道に乗せることは、新しい学会の使命だと思う。出版原稿の選定と編集だけは厳格な態度が必要だろうし、論文が掲載されることが誇りとも名誉ともなることを願っている。そしてその集積が、これまで顧られることのなかった野外での活動の歴史を編むことにつながってくればというのが私の夢である。シニアの諸兄が知恵をしぼってくだされば、経費上の問題をも含めておのずと軌道に乗るであろう。

この学会は、時代の要請や流行に追随してあわただしくつくられた一夜漬けの学会ではない。名称は変え第1回となったが、第24回大会でもよかったのである。23回の伝統が真に生かされること、これからも若いフィールド・ワーカーの成長の温床たらんことを祈って筆を措きたい。

「生態人類学研究会」を回想する

大塚 柳太郎
東京大学医学部

今から26年も前のことである。伊谷純一郎先生から、南西諸島を対象とする生態人類学の調査のために科研費を申請しようという呼掛けがあった。伊谷先生を代表者とする、この「総合研究」は採択され、1971年に調査が実施された。私は申請書の下書きを仰せつかったものの、ニューギニアにでかけたため参加できなかったが、この調査が京都大学の自然人類学研究室（当時）、東京

大学の人類学教室と人類生態学教室のメンバーと一緒に活動するきっかけとなった。

それより前から、霊長類研究のメッカであった京都大学でも人間を対象とする調査が始まっていたし、東京大学でも生態学の調査を志向する学生たちが渡辺仁先生や鈴木継美先生のまわりにあつまっていた。そのころの国内の調査地は、トカラ列島、瀬戸内海・房総半島・下北半島などの漁村、東北地方のマタギ集落などであった。一方、田中二郎さんがカラハリのサンを調査したことが大きな刺激になって、アフリカはもとより、オセアニア、南アメリカ、東南アジアのさまざまな海外の集団が私たちの調査対象に組み込まれつつあった。

このような状況の中で、生態人類学に関心をもつ者が

集まろうということになり、「生態人類学研究会」のはしりとなる会合が1973年に東京で開かれた。私の脳裏には、このときにあったはずの研究発表の内容はもはや定かでない。しかし、多くの仲間たちの生々しいフィールドワークの息吹が伝わってくる爽快な酔い心地（本当の酒の影響もあったとしても）がはっきりと残っている。多分このときのことであるが、議論が延々と続き私の家まで大挙して足を運んでくれた面々とこたつでごろ寝したことも、今となっては懐かしい思い出である。その顔ぶれの中には伊谷先生もおられ、私たちの放言に真剣に伝えてくれた。

翌年の会合は京都で開かれた。そのとき、これからは合宿形式でいこうということが誰がいますでもなく決まった。合宿するなら温泉でやろうということも、メンバーの顔ぶれからして当然の帰結として決まった。それから後は、温泉につかりながら、あるいは懇親会で酒を酌み交わしながら次回の世話役を決めるだけで、研究会は四半世紀にもわたって毎年開かれ、年とともに多くの仲間が加わり盛況になる一方であった。それでも、研究会の代表者を決めることが話題にのぼったこともないし、「生態人類学研究会」という名称をつかうことさえ議論されることもなかった。今回の学会の旗揚げにあたり、準備をしてくれた方々の努力で研究会を行った24のす

べての会場名が発掘されたが、それまでは研究会に先立ち「これは、何回目でしたっけ」という調子であった。

研究会は、このように自由でアナーキーな運営に支えられながら、紹介されるフィールドの新鮮な話題と、歯に衣を着せずに行う議論が私たちを駆り立ててきた。生態人類学会の誕生にあたっては、何人かの方々に並々なお世話になったものの、そのエネルギーもいわば自然発生的に湧いてでてきたかの感がある。研究会の発足時から毎回出席し、知らぬ間に歴史の重みが加わったことを実感してきた者の1人としてあえて発言すれば、学会になったからといって組織を護ることにきゅうきゅうとするようなことがあってはならない。今までと同じように、私たちがしたいことを私たちのしかたで実現しようと努力することこそが、この学会の値打ちだからである。

しかし、学会への移行によって私たちの満足感をもっと高めることが期待できるし、そうなるように努力しなければならぬであろう。私なりに理解している最大のメリットは、若い世代がフィールドワークを発展させるうえでの母体としての機能を果たすことである。なんとしても、私たちの集まりはフィールドワーカーを育てることを誇りにしてきたのだから。

生態人類学研究会の発足の頃

西田 利貞
京都大学理学部

生態人類学研究会が発足してから23年もたった。若い人には大昔のころのように思われるだろうが、私にとってはたいして昔のことではない。しかし、この会は書記役もニューズレターもなく、私のような創立メンバーの一人がなにか書いておかないと、発足の由来などは忘却の淵に追いやられるであろう。

この研究会の発足は、伊谷さんがサルの研究の陣頭指揮をやめて、ヒトの研究へと転身された直後の時期に一致する。この転身は、霊長類研究所で院生をとり、霊長類学に関する教育をしはじめたことと関連があるだろう。1969年12月私は伊谷さんにトングエ族の生態社会について報告せよという命を受け、10人程度の人前で、数時間話をした。池田次郎先生も聞いておられたのを覚えている。伊谷さんは、私が1965年以来、チンパンジー

調査のかたわらトングエの親族呼称や挨拶行動などに興味をもち、少しは調べていたのを知っておられた。

伊谷さんは、「ゴリラとピグミーの森」でわかるように、1960年にはすでにイトウーリのピグミーを独自の目で観察しておられる。また、1961年に始まるタンザニアのチンパンジー調査の過程で、トングエ族とのつきあいがはじまり、彼らの生活に興味をもっておられた。トングエにはほとんど徒手空拳で藪に入って、狩猟採集のみで生活できるつわ者がいた。例えば、ルケイトウという男は蜂蜜採集の名人で、農耕による収穫物をまったく持参せずに、数週間も野外で暮らすのを、伊谷さんが感嘆されていたのを私は覚えている。

かくして、1971年、伊谷さんは新婚の掛谷誠夫妻を連れてトングエ族の生態調査を開始された。私は同じ頃、学振の駐在員として家族を連れてナイロビに赴任し、デラマ・フラットに事務所・兼住居をかまえたあと、カソゲに先に着いた伊谷さんたちに合流した。このとき、トングエの徒歩調査旅行に家族ともども加えていただ

表 1. 第 1 回生態人類学研究会のプログラム

1. 煎本 孝：「千葉県千倉町の岩礁帯における海産物採集漁労民の生態学的研究」
2. 市川 光雄：「大神島の漁労活動」
3. 口蔵 幸雄：「仕事の年齢分配に関する生態人類学的調査—沖縄石垣市新川・登野城地区の漁民に関して」
4. 丹野 正：「東北地方小村における狩猟—とくにクマ狩りを中心に—」
5. 兜 真徳：「イラン（ペルシャ）、ケルマン州ラッセンジャ地区の一農村ドーラット・アーバンドの概要について」
6. 大塚 柳太郎：「ニューギニア・オリオモ地方のパプア人の生業活動」
7. 西田 利貞：「トングエ 族の植物利用序説」
8. 掛谷 誠：「トングエ 族民族誌—The Aspect of Subsistence Ecology—」

いたのは、懐かしい思い出である。

さて、伊谷さんは、東大人類学教室でおこなわれている生態人類学に興味をもたれていた。渡辺仁先生は、ダリル・フォードの弟子であり、「生態人類学」という名で東大ですでに講義を何年もやっておられていて、その方面では伊谷さんの先輩であった。私は 1969 年暮れに東大人類の助手に採用され、渡辺仁先生の生態研究グループに所属した。院生は、原子令三、大塚柳太郎、武田淳の 3 氏であった。そして、翌 1970 年には、伊谷さんは原子さんを助手に採用された。こうして、伊谷、渡辺両御大の会合の機は熟したのである。一方、大塚氏も、1970 年に医学部保健学科の人類生態学教室に助手として採用された。こうして、助教授の鈴木継美先生とのつながりもできた。

1972 年のある日、東大医学部の好仁会で私たちは会合をもった。伊谷、渡辺、大塚の三氏は確かだが、この年の手帳を私は紛失したため、他にどなたが参加されたかさだかではない。なにが語られたのかも記憶がない。そして、1973 年の 5 月 28 日、東大の学生会館の分館での会合が、生態人類学研究会の第一回であった。この名称は幹事役の私が適当につけたのだが、このときの手書きのプログラムには第一回と書かれていない。当時はまだ

毎年 1 回やることも決めていなかったものと思われる。午前 9 時から夜の 9 時頃までのハードなスケジュールであった。このプログラムをもっている人は、今や少数であろうから、ここに再録する（表 1）。このときの発表者 8 名の身分は助手 2 名、院生 6 名だが、現在全員が教授など指導的な地位についている。参加者は 20 名程度だったと思うが、参加者の名簿を作らなかったため、詳細は不明である。その前日にアフリカ学会でブッシュマンについて特別講演をした田中二郎氏がいたのは間違いない。

昨年まで 23 回の研究会がおこなわれた。この全部に出席した人はおそらく皆無であろう。私が作ったリストの穴は、田中氏が埋めてくださった（表 2）。長い年月の間によき伝統が自然に生まれていった。最後にこれらを列挙する。

このたびの私の提案は軽いもので、内容は今のままで名前だけは「学会」に変えるということだった。学生にとっては研究の発表場所が、研究会より学会の方が履歴の上でよいに決まっているからである。武田淳氏はじめ多くの会員諸氏が、この提案よりもっと積極的だったことは、喜ばしいことである。

表 2. 生態人類学研究会の歴史。

準備会	1972 年	東京大学	第 1 3 回	1985 年	伊豆
第 1 回	1973 年	東京大学学生会館分館	第 1 4 回	1986 年	声原
第 2 回	1974 年	京都大学理学部	第 1 5 回	1987 年	雲仙
第 3 回	1975 年	伊豆稲取	第 1 6 回	1988 年	箱根仙石原
第 4 回	1976 年	仙台作並	第 1 7 回	1989 年	有馬
第 5 回	1977 年	福井山中	第 1 8 回	1990 年	浜名湖館山寺
第 6 回	1978 年	京都枕川楼	第 1 9 回	1991 年	阿蘇
第 7 回	1979 年	下呂	第 2 0 回	1992 年	三朝
第 8 回	1980 年	熱海	第 2 1 回	1993 年	沖繩知念
第 9 回	1981 年	箱根宮ノ下	第 2 2 回	1994 年	水上
第 1 0 回	1982 年	南紀白浜	第 2 3 回	1995 年	弘前高増
第 1 1 回	1983 年	鬼怒川	第 2 4 回	1995 年	有馬
第 1 2 回	1984 年	岩木町百沢			

私は若いときはチンパンジーの研究が済んだら、未開民の研究に転向しようと思っていた。しかし、チンパンジーは途中でやめるには、あまりに魅力的な対象であっ

た。かくして、長いことこの研究会を横目で見ることになった私の希望は、学会になっても権威主義に陥ることがないように工夫をお願いしたい、ということである。

生態人類学研究会の「よき伝統」には、次のようなことが含まれる。

1. 一人当たりの発表時間は、少なくとも30分とする（コメントを合わせ1時間）
2. 会場と宿泊施設は、同じ場所とする（参加者全員同宿）
3. 大会参加費には懇親会費も含まれており、学生のほうが安価である。
4. 来るものは拒まないが、積極的に勧誘はしない（大きいことはよいことだ、とは考えない）
5. 温泉地を会場に選ぶ
6. 野外から戻ったばかりの研究者によるフレッシュな発表を優先

学会通信

生態人類学会発足までの経緯

生態人類学会事務局

平成8年3月に京都大学理学部人類進化論研究室が当番になって開催される予定であった第24回生態人類学研究会は、兵庫県立人と自然の博物館に担当事務局が変更になった。平成6年度に兵庫県に申請していた兵庫県立人と自然の博物館における学術交流のための援助が本決まりになり、兵庫県立人と自然の博物館での開催を京大理学部申し入れたところ、快諾を得たためである。またこの機会に、従来の研究会を学会にするのはいかなものか検討された。学会設立に向けた会合の開催を模索し、広く案内を送付したところ、研究会のメンバー12人の参加を得て平成8年2月28日（水）に京大理学部2号館で第1回の準備委員会がもたれた。掛谷誠（京都大学アフリカ地域研究センター教授）を座長に選んだあと、この研究会を育ててきた伝統や、学会設立にともなう会則や組織等について意見が交わされた。生態人類学会設立準備委員会を正式に発足させる総意のもとに委員長に田中二郎（京都大学アフリカ地域研究センター教授）

を決めた。またこの日の議論を踏まえて田中委員長が設立の趣旨を草案し、兵庫県立人と自然の博物館に事務局を設置することを決め、学会設立のためのソフトなテーク・オフは始まった。

研究会が開始する3月19日（火）午前にと自然の博物館・大セミナー室で第2回準備委員会を開き、経過報告後、19日午後の研究発表終了後に学会設立総会の開催を決めた。この総会で生態人類学会の設立が正式に承認され、初代会長に田中二郎の就任と、今回の研究会を第1回生態人類学会学術大会とすることを決めた。かくして19日午後の一般研究発表、春分の日20日（水）の公開シンポジウム、21日（木）午前の一一般研究発表という二泊三日にわたる学会が学会員や一般市民110人の参加も得て、活発に進んだ。

学会終了後の3月21日午後にと自然の博物館・中セミナー室で開かれた会長と学会員有志が参加した話し合いでは、今後の学会運営やジャーナルの発行、今年度の事務局を担当している人と自然の博物館がニュースレター第1号を発行するなどの方針が確認された。また平成9年の学会開催の当番校に会長が所属する京都大学アフリカ地域研究センターに決まり、学会の会則などの細則などについては今後徐々に整備し、次回の学会までに提示できるよう申し合わせた。

第2回生態人類学会学術大会のお知らせ

日 時： 1997年3月20日（木）～21日（金）
 場 所： 芦原保養所 芦泉荘 (TEL 0776-77-3200)
 〒910-41 福井県坂井郡芦原町堀江十楽1-1
 大会事務局： 京都大学アフリカ地域研究資料センター (TEL 075-753-7806)

生態人類学会 第1回学術大会プログラム

会期：1996年3月19日（火）～21日（木）
会場：兵庫県立人と自然の博物館

3月19日（火）

1. 有明海のり養殖における漁場の集団管理
中山 節子
京都大学アフリカ地域研究センター
2. サンゴ礁の女性たち－沖縄県久高島の海浜採集－
熊倉 文子
神戸学院大学人文学部
3. 品種名の重複に関する考察－エチオピアの農耕民
マロのタロイモ品種の命名をめぐって－
藤本 武
京都大学大学院人間・環境学研究科
4. 縄文時代の西日本における植物性食料貯蔵施設に
ついて－食糧貯蔵と生業形態との関わり－
宮路 淳子
京都大学大学院人間・環境学研究科
5. 排泄物の考古学－糞石、便所の考古学的考察－
松井 章
奈良国立文化財研究所
6. Madagascar: The Far West End of Austronesia
D. RAKOTOMALALA
京都大学東南アジア地域研究センター
7. 神話的土地権の委譲と環境知識－北東アーネムラ
ンドにおけるクラン抗争伝説において語られる森
と人間の関係－
細川 弘明
佐賀大学教養部
8. The Spiritual Relationship of Australian Aborigines
to the Land
Luke TAYLOR
国立民族学博物館
9. Research in an Australian World Heritage Area: Wild
Taro in the Queensland Wet Tropics
Peter MATTHEWS
国立民族学博物館

3月21日（木）

10. 中国・雲南省、デノ族の人口と生産・消費システム－
近代化にともなう人類生態学的適応について－
阿部 卓
東京大学医学部
11. 祭にみるアイデンティティの保持と継承－事例：
竹富島の種子取祭－
秋山 裕之
京都大学アフリカ地域研究センター
12. 河川の資源利用の持続性と多様性に関する文化生
態学的研究－川漁師からみた四万十川－
高梨 浩樹
たばこと塩の博物館

3月20日（水）

生態人類学会設立記念・公開シンポジウム
限りある地球資源
－サブシステムと保全の視点から－

総合司会

掛谷 誠 京都大学アフリカ地域研究センター
大塚 柳太郎 東京大学医学部

1. 高地山間部の人と自然：ブータン・ネパールの事
例から
大澤 雅彦
千葉大学理学部
コメンテーター：池田 博
兵庫県立人と自然の博物館
2. 南太平洋・環礁の人と自然：サタウル・ヤップ島
の事例から
須藤 健一
神戸大学国際文化学部
コメンテーター：宮内 泰介
福井県立大学経済学部
3. アフリカ熱帯降雨林の人と自然：コンゴ盆地の事
例から
佐藤 弘明
浜松医科大学医学部
コメンテーター：寺嶋 秀明
神戸学院大学人文学部
4. ナツメヤシ・オアシスの社会変化における関与要因
松井 健
東京大学東洋文化研究所
コメンテーター：佐藤 俊
筑波大学歴史人類学系

5. 伝統的集約農耕の意義：土壌保全の視点から

津野 幸人

鳥取大学農学部

コメンテーター：安溪 遊地

山口女子大学国際文化学部

生態人類学会会則（案）

この会則案は学会終了後の3月21日に会長と学会員有志が参加した話し合いをもとに、事務局が整理したものである。今後さらに、学会員のご意見をもとにして、これまでの生態人類学研究会の伝統に則った学会会則としていきたい。

第1章 名称、目的および事業

第1条 本会は生態人類学会 (The Society for Ecological Anthropology) と称する。

第2条 本会は生態人類学の発展をはかることを目的とする。

第3条 本会は、事務局を三田市弥生が丘6丁目、兵庫県立人と自然の博物館におく。

第4条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 学術集会の開催
2. 定期刊行物の発行
3. 生態人類学の普及・教育・その他必要と認める事業

第2章 会員

第5条 会員は、正会員と賛助会員とする。

第6条 会員は次の権利を有する。

1. 本会発行の定期刊行物の受領
2. 本会発行の定期刊行物への投稿
3. 本会主催の大会の出席と研究発表。ただし、大会の運営については主催機関の調整に従う。
4. 総会の出席と本会運営への参加

第7条 会員は定められた会費を納入しなければならない。

第8条 本会の会費は下記の通りに定め、会費の変更は総会で決定する。

正会員年額 2,000円

賛助会員一口 20,000円

第3章 役員

第9条 会長

会長は学会を代表する。会長は理事の中から理事会において選出する。

第10条 理事

理事は10名以内とし、本会を運営する。庶務、会計、渉外、出版などを担当する。理事は会員の投票により決定する。このほか、必要に応じて会長が若干名を選任する。

第11条 役員任期

役員任期は2年とする。なお、会長の任期は連続二期を限度とする。

第4章 選挙

第12条 理事の選挙は、選挙の年の1月1日における会員による無記名10名以内の連記投票とする。

第13条 得票数が同じ場合は年少の者を優先する。

第14条 選挙管理委員長は庶務理事があたり、若干名の委員を指名する。

第5章 会議

第15条 総会は本会の最高議決機関であり、正会員によって構成され、毎年1回、原則として学術集会の時に会長がこれを召集する。議決は総会出席者の過半数とする。

第6章 会則変更

第16条 会則の変更は総会において決定する。

付則

この会則は、1997年3月20日より施行する。

Information

網羅していないので今回は見送り、第2回大会までには発行する予定です。

会員数について

現在のところ会員数は90名で、大部分は第1回大会に参加された学会員である。「大きいことはいいこととは考えない」という生態人類学研究会の良き伝統を尊重して、事務局では今のところ積極的な会員の勧誘は起こっておりません。これまで生態人類学研究会に参加されていた方々の中にも、事務局の不手際からいまだに入会のご案内を受け取っておられない方も少なくないと思われる。入会を希望される方は、お手数ですが事務局までご連絡下さい。

会員名簿

ニュースレター第1号とともに会員名簿も発行する予定でしたが、生態人類学研究会に参加されてきた方々を

生態人類学会ホームページ

事務局のおかれている兵庫県立人と自然の博物館生態研究部では、9月にはWWWサーバーを立ち上げ、ここに生態人類学会ホームページをつくる予定です。当初はニュースレターに第1回大会の抄録もつける予定で、シンポジウムのコメンテーターからも原稿をいただきました。しかし、抄録だけで62ページにも及ぶためニュースレターの体裁を逸脱してしまうことや、予算の不足などから抄録の出版は断念しました。抄録を出版する代わりに、生態人類学会ホームページに第1回大会抄録を掲載する予定です。

URLは以下の予定です。

<http://www.oikos.nat-museum.sanda.hyogo.jp/>

編集後記

- 大変遅くなりましたが、生態人類学会ニュースレター第1号をお届けいたします。ご執筆いただいた会員の方々に改めてお礼を申し上げます（武田）。
- いろいろな方にニュースレターの表紙のデザインなどを相談しましたが、予算と版下作成をしたDTPソフト(LA_TE_X)の制約からこのような平凡なものになってしまいました。デザインは前例にとらわれず、どんどんセンスの良いものに変えていっても良いのではないかと考えています（大崎）。

1996年8月1日発行ニュースレター第1号
編集：武田淳・大崎雅一、版下作成：大崎雅一
三田市弥生が丘6丁目 〒669-13
兵庫県立人と自然の博物館生態研究部内
生態人類学会事務局
TEL: 0795-59-2021, 2016 FAX: 0795-59-2015
osaki@nat-museum.sanda.hyogo.jp